伝文

日本口承文芸学会　会報
第 60 号　2017 年 2 月 発行

日本口承文芸学会
〒150-8440　東京都渋谷区東 4 - 10 - 28
國學院大學文学部　花部英雄研究室
Tel : 03-5466-0224（研究室）
Fax : 03-5466-0368（日本文学資料室）
E-mail : info@ko-sho.org

口承文芸―聴き耳の旅５０年―

米屋　陽一

1966年、國學院大學文学部に入学し、臼田甚五郎先生、野村純一先生との出会いがあり、口承文芸学、民俗学、採訪（フィールド・ワーク）の入り口を学んだ。卒業後、私立中学・高等学校国語科の教員（1972～2011）になり、口承文芸学や民俗学の成果を盛り込んだ授業を試みてきた。また、國學院大學文学部の兼任講師（1999～2016）として、「口承文芸論」「口承文芸研究」などを担当してきた。全国各地への聴き耳の旅は終わりのない旅であった。

沖縄・久高島の神事「イザイホウ」（1978）をみた後、奄美・沖縄・宮古・八重山諸島を訪ねるようになり、近隣諸民族が気になりはじめて韓国や台湾にも数回ずつ足を運んだ。日本口承文芸学会の運営理事会で出会った伊藤清司先生（慶應義塾大学・中国雲南大学名誉教授・杏林大学客員教授）から、中国の少数民族を訪ねる・祭をみる旅に誘っていただいた。第１回（1998年８月11～19日）は雲南省で、ペー族、ナシ族を訪ねた。雲南省・貴州省の少数民族への旅は、先生が鬼籍に入る前まで続いた。祭・神話伝承・歌謡・舞踊…、未知との遭遇の旅であった。

花部英雄氏（國學院大學教授）を代表に「中国民間故事調査会」が組織された。貴州省黎平県岩洞村にすむトン族の語る民間故事を中心に記録（2007～09年）し、『中国民話の旅』（11年・三弥井書店）を上梓した。小川直之氏（國學院大學教授）とマンジュシュリー・チョウハン氏（ジャワハルラール・ネルー大学教授）を窓口にして、第１回（12年9月）「日本インド比較文化研究セミナー」（ネルー大学）が、２日間の日程で開催された。双方の教員の講演・研究発表、大学院生の研究発表、昔語り（昔話）など盛り沢山の催し物であった。民俗学の講演は小川氏、口承文芸学の講演は私が担当してきた。講演テーマは、第1回「日印の民話比較研究―民話の記録・保存と継承の方法をめぐって―」、第2回（14年2月）「近世の赤本から近代の赤本へ―疱瘡除けの願いを中心に―」、第3回（15年9月）「聴き耳を育てる―ナゾかけ遊びの場からムカシ語りの場へ―」、第4回（16年9月）「昔語りの魅力―擬音語・擬態語/うたムカシ/聞きなしをめぐって―」であった。第4回の昔語りの語り手は、渡部豊子さん（新庄）、大平悦子さん（遠野）、矢部敦子さん（和歌山）であった（「國學院大學取材日誌」参照）。

貴州省・トン族の大歌や民間故事、インドの吟遊詩人、絵解き（パトチットラ）、掛け合い歌、操り人形劇…との出会いは刺激的であった。『野村純一著作集』第五巻「昔話の来た道・アジアの口承文芸」を座右に置き、日本・中国・インドの旅のなかで口承文芸の意味を考えてきた。インド・中国・日本の歴史・文化の大きな流れのなかで口承文芸の意味を考えてきた。今後に残された課題は山積みだ。新時代の口承文芸研究は多岐亡羊である。若き研究者の大胆な発想に期待したい。　（千葉県）

第71回日本口承文芸学会　研究例会報告　　黒川　麻実

「現在の学校教育における「伝統文化」教育の位相を問う
―教科書教材・授業実践の事例などを通して―」

第 71 回口承文芸学会研究例会は、標記のテーマのもと 2016 年 12 月 3 日、関西福祉科学大学において開催された。シンポジストとして高木史人氏、立石展大氏、伊藤利明氏、矢野敬一氏を、コメンテーターに蔦尾和宏氏、生野金三氏を迎え、学校教育で推し進められている「伝統文化」教育と、それを巡る教科書教材の実際や授業実践の現状について、様々な観点から議論を進めていった。

シンポジウム開催の立役者である高木氏は、2008 年度学習指導要領改定より設置されている「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」との関連から、学校教育における「伝統」や「口承文芸」の在り方について問題提示を行った。本来的には「口承文芸」であるはずの「昔話」が教科書という媒体に掲載されるにあたり、再話・再創造による内容の大幅な変容や「聴く」という側面の欠落といった問題を引き起こしている。この現状が何を意味しているのかについて、氏は「口承文芸」への真摯な眼差しから述べられた。

続く立石氏は、実際にどのような形で小学校国語科教科書に昔話が提示されているのかについて、中国昔話・ヨーロッパ昔話という観点から具体的事例を交えつつご報告された。中国の昔話は教科書への採録が減り続け現在は皆無に等しい。一方で、ヨーロッパの昔話は、低学年向けに見開きを用いたファンタジックな装丁で紹介されている。原話との比較から教科書に昔話が掲載されることの意味や昔話を扱うことの意義について氏の発表から多くの示唆が得られた。

伊藤氏は、道徳教育という観点から二宮金次郎の説話と教材として使用することについて論じた。薪を背負いつつ本を読む金次郎の姿は我々にもなじみ深い。しかし、実際の金次郎を主題とした教材内容や金次郎像の現状を踏まえた際、道徳教育として扱う際に留意しなければならない点があることを伊藤氏は指摘した。道徳が教科として位置づけられることになった今、金次郎をはじめとする偉人たちの説話と「伝統文化」教育の関わりとその方向性について、しっかりと見定めていく必要がある。

最後は矢野氏による、郷土教育として実践されている新潟県村上市における鮭文化についての報告である。地域に根付く鮭文化について、子供たちは塩引鮭作りやナワタ汁の調理を通して体験学習として学ぶ。「伝統文化」の継承と教育との関わりを体現した本実践であるが、実は近年になって行われた鮭の保護・観光化の際に生じた「言説」が古くからの「伝統」として伝わっていることが矢野氏の調査により判明した。すなわち、綺麗に装飾された「伝統」が上書きされ、子供たちはそれを本来的なものとして認識してしまっているのである。このような現状は、本実践に限らず日本各地に存在している可能性がある。

各氏によるご報告後は、コメンテーターの蔦尾氏、生野氏を交え、白熱した質疑応答が繰り広げられた。学校教育を巡る状況が目まぐるしく変わりつつある中、「伝統文化」教育の方向性をしっかりと見定めていくことは喫緊の課題である。「伝統」とはなにか、教育ではどのように扱うべきなのか。口承文芸研究で積み重ねられた知見を今こそ、様々な分野との議論の中で発信していくことで、この大きな課題に活路を見出していける可能性があることが、本例会を通して示されたのではないだろうか。

（広島県）

◆船橋の民話を聞く会

平成 28（2016）年４月に、卒業論文の調査で「船橋の民話をきく会」会長の荒石かつえ氏から、会の発足や経歴・活動についてお話を伺った。

船橋の民話をきく会は平成２（1990）年に、千葉県船橋市の宮本公民館にて発足した。前年に、同公民館の実践講座「日本の民話」最終回で船橋市の民話を聞き、講座修了生が身近な話の温かさにふれた。そして、もっとこの地の民話を聞きたいという思いから、実践講座の講師も務めた日本民話の会の米屋陽一氏を指導者に迎えて会は発足した。

「まず民話を聞くことがだいじ」という米屋氏の提言から、「船橋の民話をきく会」と名付けられた。現在会員は９名。多くの人がほかの活動も精力的に行っている。結成当初は、月に一回の採話や祭りの見学等を行い、見聞きしたことを『ふなばしむかしむかし』にまとめていた。会報は現在でも２～３年に１回ほど発行されており、平成 28 年 11 月 30 日に第 13 号（2016・秋）が発行された。印刷から製本まですべて会員の手作りである。

発足した翌年には、千葉県で行われた「国民文化祭」で船橋市が「民話劇」の会場となり、会も携わった。それをきっかけに「千葉民話フェスティバル」や「船橋民話フェスティバル」の開催、船橋市の小学校へ出向いて民話を語る等、活動の幅も広がっていったとのことである。

現在では、主に米屋氏を講師とした民話講座「遠野物語から広がる世界」を開催している。この講座は平成 29（2017）年で 13 年目を迎える。４月～11 月まで全７回（８月はお休み）、毎月ほぼ第３土曜日の 15 時半～17 時半に、「船橋市男女共同参画センター」にて行われている。

私も、昨年から参加する機会を得た。米屋氏による『遠野物語』を題材とした興味深い話、荒石氏の心温まる民話の語り、また平成 28 年度は人形劇や遠野弁での語りなども行われた。実際に参加してみて、大学の講義とは違う自由で温かみのある雰囲気に居心地の良さを感じた。生の語りを聞いたのは、この場が初めてであったので心打たれた。民話の持つ魅力は、そのような聞き手の心を和ませるところではないかとも感じた。

◇連絡先：〒273-0001　千葉県船橋市市場３－16－1－211　荒石かつえ
◇TEL　047－424－5298

事務局便り

◯会員の異動（敬称略）
《新入会》阿部いそみ（山形）・黒川麻実（広島）

◯寄贈書籍（2016年8月～12月受け入れ）
- ハンス＝イェルク・ウター著、加藤耕義訳、日本語版監修 小澤俊夫『国際昔話話型カタログ　分類と文献目録』（有）小澤昔ばなし研究所、2016年8月
- アディル・ジュマトゥルドゥ　トカン・イサク著、西脇隆夫訳『現代のホメロス　叙事詩マナスの語り手ジュスプ・ママイ評伝』ブイツーソリューション、2016年10月
- 神奈川大学日本常民文化研究所『民具マンスリー』第49巻 8号・9号　2016年11月・12月

◯日本口承文芸学会事務局
〒150-8440　東京都渋谷区東4－10－28
國學院大學文学部　花部英雄研究室
Tel: 03-5466-0224（研究室）
Fax: 03-5466-0368（日本文学資料室）
E-mail: info@ko-sho.org

日本口承文芸学会を広くご紹介下さい

日本口承文芸学会への入会を希望なさる場合は、事務局にご連絡いただくか、学会ＨＰ（http://ko-sho.org/）から入会申込書をダウンロードして、ご記入のうえお送りください。入会金なし、年会費4000円です。郵便振替口座　00180-4-44834をご利用下さい。